

# 英語劇を通して日本人児童に英語力を定着させる試み

— コミュニケーション能力からみた発音・語彙・文型の定着を目指して —

Making a Solid Foundation of English Ability through English Plays  
at a Japanese Private Elementary School  
— From the Communicative Skills Point of View  
in Terms of Pronunciation, Vocabulary, and Grammar —

米田 佐紀子

## アブストラクト

小学校英語教育で英語力はどのようにしたらどれくらいつけさせることができるのだろうか。現在特に必要とされているコミュニケーション能力の育成に対して、英語教育上有効であるといわれる英語劇はどのくらい有効なのだろうか。

本論文は2007年度に交付された科学研究費補助金（平成19年度基盤研究C課題番号19520537）「小学校英語教育で培われる英語力についての研究 —国際的評価基準を用いて—」の研究の一環として、私立小学校の取り組みの中から、英語劇の実践を通して、その成果と課題を探ったものである。

今回の研究からは子どもたちの意欲を高めることができるという効用は見られたものの、コミュニケーション能力から見た音声や語彙、文型の習得について明らかな効用があるとは結論付けられなかった。要因として、外国語としての英語の習得において、言語転移理論における構造的・非構造的な要因が大きな役割を果たしていると考えられる。今後、理論と実践の両面から継続的な研究が必要である。

キーワード：小学校英語教育、英語劇、発音・語彙・文型の習得、言語転移

## 1. はじめに

本論文は2007年度に交付された科学研究費補助金（平成19年度基盤研究C課題番号19520537）「小学校英語教育で培われる英語力についての研究 —国際的評価基準を用いて—」の研究の一環である。この論文の焦点は、英語力を児童につけるための実践として英語劇にどのような効用があり、また課題は何なのかを探ることである。

現在の日本では学習指導要領において小学校での英語は「必修化」される方向にはなったものの「教科」ではなく、また学習内容や目標も明記されていない<sup>1)</sup>。そんな中で、小学校6年間でどこまで英語力を着けることができるのかを明確にすることは急務である。

筆者が英語教育を実践している北陸学院小学校では「教科」としての四技能に重きを置いた教育を行っている。客観的に自分たちの教育を評価すると同時に、どこまで日本人児童が英語力をつけられるのかを測定するために児童英語検定Cambridge Young Learners English TestのStartersを用いて検証している<sup>2)</sup>。

詳細は後ほど述べるが、いわゆる座学だけでは小学生の発達段階に適した指導法とはいえない。中学校以降の教育でさらに英語力を伸ばしていく英語力の基礎作りが小学校段階の目標と捉えている。具体的には四技能を用いたコミュニケーション能力や語感を養うことを含めた語学力を養うが目標であり、それがついた時にテスト等の評価においても点数として表されるものだと考える。

そこで、本論文では、英語があくまでも「外国語としての英語」である日本において、英語を通した本物のコミュニケーションを図る機会として、また、コミュニケーションな四技能をつけさせるための活動のひとつとして、北陸学院小学校で行っている英語劇について論じる。流れとして、まず先行研究について述べ、その後本学の取り組みと子どもたちへのアンケートなどについて述べ、効用と課題について検討する。

## 2. 先行研究に見られる英語劇の効用

世界で通用するような英語コミュニケーション能力を高めることがこれからの英語教育の目標だといわれる<sup>3)</sup>。しかし、「楽しい英語」「慣れ親しむ英語」を行っているだけで、本来の目標である英語によるコミュニケーション能力が身につくのだろうか。どの言語でのコミュニケーションにも(1)文法能力や言語能力、(2)ストラテジー能力、(3)ディスコース能力、(4)社会言語学的能力などの能力が必要である<sup>4)</sup>。楽しいだけでも正しいだけでも英語はコミュニケーションの道具とはならないことが分かる。あくまでも、きちんとした形の文を、場に適した形で駆使する能力をつけなければならない。

上記の目標を達成するために、劇・劇化は効果的な側面を多く持っていると考えられており、すでに様々な実践が行われている<sup>5)</sup>。佐野正之著『英語劇指導マニュアル』によれば、英語劇は英語教育上、次の8つの意義があると言う<sup>6)</sup>。概要は次の通りである。

第1に、コミュニケーションに関わる心理的要因の強化が挙げられる。佐野のカリフォルニア大学での実験によると劇を取り入れた授業では心を開いて相手を理解し、自分の意見も誤りを恐れずに表現する姿勢がついたことが示されたという。

第2に、「聞く」「話す」活動として、決まったせりふを何度も練習することによって、正しいイントネーションや発音の習慣形成になるだけでなく、相手のせりふを聞いて反応しなければならないため「聞く」活動にもなる。

第3に、多様な手振りや表情を用いて表現したり、それを理解したりすることが英語劇には必須であり、これは通常のコミュニケーションと共通するものである。この点が本物のコミュニケーションのための英語を教える絶好の機会として劇が有効な点である。

第4に、せりふを場面や文脈の中で理解し表現することから、現実的な言語使用の中で言語機能を正しく理解し、適切に表現する訓練となる。

第5に、役になりきって演技し、表現することが英語を用いて自己表現する基礎的な活動とな

る。この感情移入は、言語学習の成功の必要条件とも言われている<sup>7)</sup>。

第6に、教師や友達と協力しながら劇作りに取り組む過程で、望ましい人間関係を築くことができ、楽しく英語を学ぶ機会となる。

第7に、明確な目的意識を生徒に与える。公演や発表に向けての活動が前提となるので、生徒たちは一生懸命に取り組む。

第8に、AET (Assistant English Teacher 外国人補助教員) との絶好の共同作業の機会となる。AETは、発音やイントネーションの指導に加え、せりふの修正などには強力な助っ人となる。

こういった点で、英語劇は「コミュニケーションの能力と態度を育成する上で効果的な手法」であるとまとめている。

英語劇が以上のようにコミュニケーションな英語を身に付けさせるために有効であるとしても、人員と時間は限られている。前出の佐野は準備について次のように述べている<sup>8)</sup>。まず、台本作り・台本選びの際の留意点であるが、次の4点である。

- (1) 生徒が日本語で演じて興味を持てる内容の脚本にすること。
- (2) 観客にアピールするものにするため感動を伝えることのできる脚本にすること。そのために、話題は観客の身近なものとし、話の筋が単純明快で動きのある20～30分のものにする。
- (3) 対訳付きの台本にする。英文理解に時間を割かずに済み、教師の労力も軽減できるものにする。
- (4) 演出の手引きがあるものにする。

台本が決まったら本読み、配役、読み合わせ、発音練習、稽古へと入っていく。稽古についての佐野の説明は詳細で本格的である。本論文では紙面の関係から省く。

小川は、「小学生の英語劇指導」の中で、自分の経験から次のように劇の効用について述べている<sup>9)</sup>。まず、英語劇を発表するということそのものが目標になり、そのために大きな声ではっきりと正しく発音する練習が行える。次に、劇によって教科書の学習だけでは学べないしぐさや表情が学べる。それと同時に小学生ならではの注意も必要であると述べている。まず、全員に一言は言わせるために台本を作らねばならないし、大勢の子どもが舞台上を動くような構成にしなければならない。配役の時には学級担任と相談し、学校生活全体の視点から決める。細かい事柄に配慮しながら行うが、最終的には子どもたち一人ひとりがベストコンディションで舞台上に上がり達成感を持たせることが大切であると述べている。

以上、英語劇の効用と留意点について述べてきた。次の章では本学の取り組みについて述べていく。

### 3. 北陸学院小学校での英語劇への取り組み

#### 3. 1 北陸学院小学校の「英語科」の概要

北陸学院小学校は石川県金沢市にある小規模の私立小学校である。本小学校は学校法人北陸学院の一部である。北陸学院には幼稚園、小学校、中学校、高校、短期大学がある。小学校は、各学年定員30名で1クラスという小規模校である。北陸地方3県の中で唯一の私立小学校であり、公立志向が強い地域の中で教育方針に賛同する家庭の子女が集まっている学校である。この点、学力を

中心とした選抜試験によって入学者が決まる傾向が強い大都市の私立小学校とは性質が異なる。

設立がアメリカ人の宣教師だった流れを受け、英語教育を小学校教育の柱の一つとして掲げており、英語は「教科」として捉えられている。1年生から6年生までが40~45分授業を週に2回行っている。

英語科では育成する目標として、次の3つを挙げている。

- (1) 自己表現力を含むコミュニケーション能力
- (2) 十分な語学力（会話だけにとどまらず読み書きの能力を併せ持つ）
- (3) 地球的視野と異文化理解

教科書にはオックスフォード大学出版のMagic Time<sup>10)</sup>とEnglish Time<sup>11)</sup>を用い、各ユニットごとに「聞く・話す・読む・書く」の四技能のテストをし、「コミュニケーション」をオーラルだけではなく、読んだり書いたりする力も付けられるよう配慮している。通知表にも「関心・意欲・態度」「聞く・話す」「読む・書く」「知識・理解」の項目があり、それぞれの項目について、「積極性」と「到達度」の観点から評価を行い、保護者に知らせている。

保護者の英語教育に対する関心は高く、2006年7月に筆者が行った英語教育に関するアンケート調査（135家族配布中95家族解答）では、北陸学院小学校を選んだ理由に48家族が「英語を重視した」と答えており、85家族が「小学校での英語教育に賛成」と答えている。帰国子女や外国人を親に持つ児童もあり、この地域では国際色豊かな学校としての評価を得ている。

2004年度から(財)日本英語検定協会主催の実用英語技能検定の5級を、5、6年生の希望者に実施しており、毎年9割以上の合格者を出してきた。2006年度に実施したCambridge Young Learners English TestのStartersでは日本人児童の平均を上回っただけでなく、日本人受験者平均や韓国人受験者平均と比べて、四技能のバランスが取れている結果が見られた<sup>12)</sup>。このように本学での試みは、客観的測定によって、ある程度の成果を得ているが、学年差がある事や特定の小学校での結果である事などを考慮すると、現時点でのデータからこれが小学校で培える英語力であると結論づけることは危険である。

本学の取り組みを英検等を使用して検証しているため、テストのための授業をしているかのように見えるかもしれないが、本学は「中学校の先取り」やテスト対策のための教育を行っているのではない。あくまでも、児童の発達段階を考慮しながら教育本来が持つ「意図的・組織的・計画的」な教育活動の中で、児童がそれぞれの年齢や学習ストラテジーに適した指導法を持ってすれば、きちんと積み上げられたコミュニケーションな英語力を四技能について養うことができるという考えの下に、外国人教師と日本人教師がチーム・ティーチングで実践し、研究を重ねている。

本論文では、英語力をつけるに当たり、年に一度行っている英語劇を通してどのような効果が見られるかについて、特に、発音・語彙・文型の定着を中心に検討していく。

### 3. 2 英語劇の取り組みの概要

北陸学院小学校では毎年10月末に日ごろの学習成果の発表の場として、「学習発表会」を行っている。この発表会で、1年生と6年生が英語での発表に取り組む。1年生は自己紹介や身の回りのことをチャンツや歌で発表し、6年生は日々の授業における既習の語彙や表現を取り入れた英語劇

## 英語劇を通して日本人児童に英語力を定着させる試み

を行う。これまで「桃太郎」や「シンデレラ」などを行ってきたが、いずれも、学級の児童数と既習事項など本学の特徴に合わせて学級担任が作るのも、どんな有名なストーリーでも「北陸学院小学校バージョン」となる。話の筋が、原作の筋と多少異なっても、観客である下級生や保護者にも分かってもらう構成になるよう工夫を凝らしている。

劇を作り上げる手順は以下の通りである。

- (1) 5～6月。学級担任と英語科教師で日ごろの様子や前年度までの劇などを踏まえ、タイトルについて話し合う。
- (2) 6～7月。英語科教師が既習事項を一覧にして学級担任に示す。
- (3) 7～8月。学級担任が日本語の原作を作り英語科教師に渡す。
- (4) 8月。英語科教師が英訳をし、学級担任と話し合い、細かい調整をする。
- (5) 8月～9月。学級担任と英語科教師で配役について検討する。最終的な判断は学級担任が行い、児童に発表する。
- (6) 9月。台本を配布し、音読練習を開始する。
- (7) 9月～10月。秋休み1週間を使ってCDを聞きながら各自練習する宿題を出す。
- (8) 10月。音読練習から立ち稽古、仕上げまでを行う。
- (9) 10月末。発表。

子どもたちは、学習発表会を毎年楽しみにしており、近づいてくると、作品や配役について質問をしてくる。配役については、子どもたちの希望と英語力がうまくかみ合うとは限らない。子どもの性格や友人関係などを理解している学級担任が、英語科教員との調整を図りながら、子どもたちが前向きな気持ちで取り組めるよう、子どもと話し合いながら進めていく。

### 3. 3 英語劇の効用と課題

#### 3. 3. 1 北陸学院小学校における英語劇実践の背景

筆者が北陸学院小学校での学習発表会に関わり始めてから4つの劇をしてきたが、日常の授業に基づいたオリジナル英語劇が子どもたちの英語に対する姿勢に影響を及ぼしていると感じている。

通常の授業でも、座学が中心となるphonicsやreading、writingなどの学習に加え、全身を使ったスキットやアクティビティを多く用いている。前述したように、体全体を動かし、スキットなどでは役になりきって文を発音して、伝え合うことにより、自然な発音やイントネーションが身につくだけでなく、コミュニケーションの道具として英語を体得することをねらいとしている。そのため、お面やおもちゃの小道具などを用意して「本物のコミュニケーション」を作り出そうと工夫をするが、日常化してしまうと新鮮味がなくなり、積極的に関わる子どもと、そうでない子どもが出てくるという問題が出る。指名すると棒読みで終わらせ、感情移入やジェスチャーなどを交えた「本物のコミュニケーション」に近づけようと努力しない子どももいる。この問題を如何に解決するかということが課題の一つである。

それに対し、学習発表会での英語劇には次のように授業とは異なる決定的かつ重大な要素がある。

- (1) どの学年も必ず全員が自分のせりふを大きな声で発表しなくてはならない、まして、最高学年である6年生は下級生のお手本にならねばならないというプレッシャーがある。その

点を子どもはすでに理解している。

(2) 親・兄弟・友人・親戚など多くの観客が見に来る晴れ舞台であるからしっかり発表しなくてはならない。

(3) 日常の授業では用意できない照明や衣装・道具等を使うので、臨場感があふれている。

子どもたちは小道具などで動機付けを図らなくても、最初から英語劇に対して意欲的である。その一方、表面的なことに捉われ、英語そのものの発音やコミュニケーションのための表情・動き、そして何よりもそれを観客に伝えるという側面を忘れてしまいがちである。

英語教師としては、先行研究にもあった通り、学習発表会での英語劇を、発音・イントネーション・語彙・文型、そしてそこにジェスチャーを交えた「本物のコミュニケーションの体感」と日常の学習内容の定着を図る機会と捉えて、指導を行っている。その一方、いくつかの課題が見えてきている。

まず、発音やイントネーションの習得が期待ほどできていないのではないかという点である。CDを台本と一緒に与えているものの、日本語の音韻ルールに影響され、気づくとカタカナ発音になってしまう。まして、大きな声で言おうとすると、そちらに気を取られ、英語本来の発音を忘れてしまう。

また、文型や語彙についても、身についていると思っていた英文の理解ができておらず、いざ立ち稽古になって、「このせりふなら、こういった感情表現になる。」と説明すると「だって英語の意味が分からないんだもん。」と言われ、既習事項を多用した日英対訳の台本を作り、音読指導の中で説明していても、子どもにはコミュニケーションの道具として捉えられていないと気付かされることがある。

子どもたちの英語音声は母語である日本語に影響されることや、言語を伝達のための道具と捉えにくい背景には、言語転移理論でいう「構造的・非構造的要因」が強く影響していることがあると考えられる<sup>13)</sup>。構造的要因とは音声や語彙・文型といういわゆる言語的要因であり、非構造的要因とは心理的要因や社会・個人的要因等、言語的側面以外の要因のことである。これらの問題を踏まえた上で、日本人児童の英語教育の目標・指導を考えていくことが必要である。

次の章では、コミュニケーション能力の視点から見た発音・イントネーション・語彙・文型や子どもの意欲の変化について、2007年度の劇から詳しく見ていく。

### 3. 3. 2 2007年度の劇を通して見た成果と課題

ここでは、2007年度に行った英語劇を通して成果と課題について検討していく。

今年度の6年生は17名の少人数の学級である。2005、2006年度に「浦島太郎」「シンデレラ」を行った。学級担任との協議の末、2007年度は過年度とは風合いの異なった「3匹の子ぶた」にすることに決定した。前述したように学級担任（2007年度は金子謙一教諭）が日本語で台本を書き、6年生の「英語」を米田と共に担当している外国人講師で北陸学院短期大学のGavin Lynch講師が英訳をし、米田が確認を行うという3人体制で台本作成に当たった。資料1はその台本である。

<資料 1 2007年英語劇台本>

2007 HokurikuGakuin  
School Performance Day 6th Grade  
**3びきの子ぶた – The 3 Little Pigs**

注:下線は既習文型に則ったもの(語彙等は必ずしも既習とは限らない)。

Pigs' names: Ham (Little Pig 1), Pork (LittlePig 2), Rib (Little Pig 3)

Wolves' names: Choro (Wolf 1), Peko (Wolf 2), Gyao (Wolf 3)

**Scene 1 <At the wolves' house 狼の家で>**

司会者が豚たちは水道屋だと伝える。

Roles	Lines	台 詞
	(The 3 little pigs are fixing the shower's tap)	(3匹の子豚、シャワーのじゃぐちを直している。)
Little Pig 1	And with a last twist .....	これでよし、と。
Little Pig 2, 3	<u>The shower's ok now! Good job Ham!</u>	もう大丈夫ですよ。(そでへ。)
	(Wolves enter.)	(狼、入ってくる。)
Wolf 1	<u>Thank you!</u>	ありがとう。
	(Shows himself on stage, turns on the shower.)	(体を洗い出す、シャワーをひねる。)
Wolf 1	Ow, ow, ow, ow, ow, ow, ow. (The 3 little wolves panic.)	アッチッチッチッチー。 (3匹の狼あわてる。)
Wolf 2, 3	What's the problem, Choro? (Peko and Gyao try the shower and also get burned.) Ow, ow, ow, ow, ow.	チョロ、どうなってるんだー。(試したベコとギャオもやけどをする。) アッチッチッチ
Wolf 1, 2, 3	It's these 3 little pigs!!	この子豚どもー!!

**Scene 2 <At the hospital 病院で>**

The waiting room. Other animals are waiting.

待合室。他の動物が待っている。

<b>Roles</b>	<b>Lines</b>	<b>台 詞</b>
Nurse (Rabbit)	<u>Next please!</u>	次の方、どうぞ。
Rabbit	(Wolves 1-3 appear on stage.)	(狼 1 ～ 3 登場)
Wolf 1	(While holding his head) Get out of my way. Move it! <u>I'm first!</u>	(頭をおさえながら) どけどけじゃまだ。俺様が先だー。
Chicken	<u>Those wolves are always so arrogant.</u>	狼っていつもいばってるね。
Wolf 3	<u>What's this?</u> If you keep chattering, I'll eat you! (Goes to the examination room.)	何だと！ガタガタ言うとおっちまうぞ！ (診察室へ。)
Rabbit	<u>What's your address?</u>	狼さんご住所は？
Wolf 3	<u>31 Wolf Road.</u>	31 Wolf 通り。
Rabbit	<u>How do you spell "Wolf"?</u>	"Wolf" はどうつづるのですか？
Wolf 2	<u>W-o-l-f</u>	W-o-l-f
Rabbit	<u>Thank you. Have a seat, please.</u>	ありがとうございます。お座り下さい。
Doctor (Cow)	What's the matter with you today?	今日はどうしましたか？
Wolf 2	We're burned.	やけどだ。
Cow	(Uses the stethoscope.)	(ちょうしんきを当てる。)
Rabbit	<u>Now, please lie down here.</u> (Prepares to give an injection to each wolf.)	それではここに横になって。 (3匹、それぞれ横になる。)(注射の準備)
Wolf 1	<u>No! No! No!</u>	いやだ、いやだ。
Wolf 2	<u>Me, too!</u>	俺も。
Wolf 3	And me, three!	俺もだ。
Wolf 1, 2, 3	Wahhhhhh (run away)	ギャー。(逃げだす。)
Animals	(Mutter to each other.)	(こそこそ話す。)



Scene 3 <The Wolf Corps 狼軍団>

Roles	Lines	台 詞
Boss	Choro, Peko and Gyao! Whatever happened to you?	チョロ、ペコ、ギャオ、一体どうしたんだ？
Wolf 1, 2, 3	(Stand to attention.)	(きをつけ。)
Wolf 2	We got a little burned. (Scratches his head.)	ちょっとやけどしまして。(頭をかきかき。)
Lieutenant	Tsk! Fools! (Hits the wolf's head.)	ドジッ、アホッ (頭をたたく。)
Lieutenant	Wolves have to be strong! Right, boss. (Boss nods).	狼は強くなくてはいかん。ね、ボス。(ボスうなずく。)
Boss	We'll eat those pigs!	あいつらを食っちゃうんだ。
Lieutenant	<u>Do you understand? Find them!</u>	わかったな。まず3びきの子豚のいどころをつきとめろ。
Wolf 1, 2, 3	Yes, sir!	へい！

Scene 4 <The Straw House and the Wolf Corps ワラの家と狼軍団>

Roles	Lines	台 詞
	(3 little pigs appear on stage, skipping.)  ♪ <i>We're not afraid of the big bad wolves, big bad wolves, big bad wolves.</i> ♪ <i>We're not afraid of the big bad wolves, ta, da, da, da, da</i> (Repeat)	(スキップして出てくる3匹の子豚。)  ♪ オオカミなんてこわくない～ こわくない～ こわくない～ (くり返し)
Donkey	Welcome! Welcome! (While showing straw, sticks and bricks.)	いらっしゃいませー、いらっしゃいませ。 (ワラ、木の枝、レンガを見せながら)
Little Pig 1	<u>How much is a bundle of straw?</u>	おじさん。ワラ1束いくら？
Donkey	<u>They are one dollar each.</u>	ワラ束一つ1ドルだよ。
Little Pig 1	<u>We'll take it!</u>  (The three pigs build a house.)	くださいな。  (家を作る。)

Bear	<u>This is a wonderful house!</u>	ステキな家だね
Squirrel	<u>But is it okay?</u>	でも大丈夫かな
Elephant	If the wind blows ...	風がふいたら...
Squirrel	(Checks its sturdiness)	(丈夫かたしかめる。)
Little Pig 1	<u>It's fine! It's strong and sturdy. Please come in. (They dine on fruit, etc.)</u>  (The wolves appear. They take a good look around the straw house. The lieutenant carries the bosses' chair.)	大丈夫。がんばろうよ。さ、入ってー。 (果物など食べる。)  (狼軍団登場、ワラの家をぐるりと回る。) (サブはボスのいすを運ぶ。)

### Scene 5 <The coaxing voice strategy ~ Blowing down the straw house

ネコなで声作戦～ワラの家を吹き飛ばす>

Roles	Lines	台 詞
Wolf 2	<u>Hello!</u> (Aggressively, the animals are frightened.)	ハロー。(強気で、動物はびびる。)
Chicken	<u>He, He, Hello.</u> (moving stealthily with the other animals) Who is it?	ハ、ハロー。(他の動物とコソコソ話す。) どなたですか？
Wolf 2	<u>It's the wolf. Open up! Open up!</u> (The animals shudder.)	狼だ。開けろ。開けろ。(動物、震え上がる。)
Wolf 3	<u>Let's all become friends!</u>  (The pigs don't open the door.)	お前ら友達にならないか？  (豚たちはドアを開けない。)
Lieutenant	No good! No good!  "Little pig. How are you?" <u>Now, try it.</u>	ダメだ、ダメだ。  「こぶたちゃあ～ん。ごきげんいかが？」 やってみろ。
Wolf 1, 2, 3	"Little pig. How are you?"	「こぶたちゃ～ん、ごきげんいかが？」
Lieutenant	<u>That's great! Now go.</u>	うまいぞ、いってこい。
Wolf 2	<u>Hello♪</u>	ハロー♪

## 英語劇を通して日本人児童に英語力を定着させる試み

Fox	<u>Hello.</u>	ハロー。
Wolf 3	<u>Little pig. How are you?</u> (The animals approach the door.)	こぶたちゃ〜ん、ごきげんいかが？ (動物たち戸の方へ近寄る。)
Little Pig 1	<u>I'm fine, thank you. Who are you?</u>	元気だよ。あなたはだ〜れ？
Wolf 3	<u>We are kind and friendly wolves. How about playing together?</u>	僕たちはやさしい狼だよ。一緒に遊ばないかい？
Wolf 1	<u>Please, please.</u>  (The lieutenant is happy with his actions.)	おねがぁい、おねがぁい。  (サブ、その調子という様子。)
Giraffe	What will we do?	どうする？
Animals	(Thinking.)	(考えている。)
Elephant	I think it's ok. <u>Let's play together.</u> (Relaxing while reading the newspaper.)	いいんじゃない、一緒に遊べば。 (新聞を読んでのんびり。)
Little Pig 1	<u>Please wait!</u> We have to be careful!	待って！気をつけないと。
Fox	<u>That's right. We can't open the door — it's not good!</u>	そうだよ、ダメだめ、開けちゃだめ。
Wolf 1	Awww. They almost came out! (Frustrated.)	クソウ。もう少しだったのに。 (くやしがる。)
Boss	You miserable animals! I'll blow this straw house down! <u>1, 2, 3,</u> Huuuuuuuuuufffffff. (The pigs run away, while everything is blown away.)	情けないやつらだ。俺がこんなわらの家なんか吹き飛ばしてやる。1, 2, 3、フー。 (子豚達、いろんなものをもって飛ばされ、逃げる。)
Wolf Corps	Wait!!  (Strobe lighting) (Blackout)	待てー。  (ストロボ) (暗転)

### Scene 6 <Blowing down the wooden house 木の家を吹き飛ばす>

Roles	Lines	台詞
Little Pig 2	Ah, ah, that was close!	はあはあ、危なかった。
Giraffe	<u>Let's make a stronger house next time, Pork.</u>	次はもっと丈夫な家を作ろう。
Donkey	Welcome! Welcome! (While showing straw, sticks and bricks)	いらっしやいませー、いらっしやいませ。 (ワラ、木の枝、レンガを見せながら。)
Little Pig 2	<u>How much are these?</u> (Showing his money.)	ねえ、おじさん、いくら？(お金を見せて。)
Donkey	<u>They are two dollars each.</u>	1束2ドルだ。
Little Pig 2	<u>We'll take them!</u> <u>Everyone, please help!</u>	ください。みんな手伝ってー。
Animals	<u>Okay, Pork!</u>	はいーい。
Squirrel	<u>A wooden house is strong.</u>  (sound of house construction)	木の家は丈夫だね。  (トンテンカンテン家を建てる音)
Elephant	We'll feel safe here.  (The wolf gang appears on stage. The lieutenant carries the bosses' chair)	これで安心だな。  (狼軍団登場。サブはボスのいすを運ぶ。)
Wolf 2	Rarrrr, where did they run to?	ガオー、どこへ逃げやがった。
Wolves	(sniff around)	(クンクンクン)
Boss	(Gestures directions to the wolves. The wolves nod.)	(指で指図する、狼たちうなづく。)
Wolf 3	Hmmm. <u>Now they have a wooden house.</u>  (Laughs.)	ふん、木の家か。  (笑う)
Boss	I'll blow this house down! <u>1, 2, 3,</u> Huuuuuuuuufffffff. Ehhhh? All of you must blow too!	こんな家吹き飛ばしてやる。1, 2, 3, フー、あれ？ お前たちもやるんだ。
Boss	<u>1, 2, 3,</u> Huuuuuuuuuufffffff.	1, 2, 3, フー
Wolf Corps	(The pigs run away, while everything is blown away.)	(子豚達、いろんなものをもって飛ばされ、逃げる)
Wolf Corps	<u>Wait!</u>	待てー。

**Scene 7 <The hot potato strategy: The brick house can't be blown down**

石焼き芋作戦 レンガの家が吹き飛ばない

Roles	Lines	台 詞
Little Pig 2	Huh, huh, huh, that was close!	ハアハア、危なかった。
Little Pig 2	A wooden house is no good. I thought it was ok but... it wasn't.	木の家はだめかあ。大丈夫だと思ったんだけどなあ。
Donkey	Welcome! Welcome! (While showing straw, sticks and bricks.)	いらっしやいませー、いらっしやいませー (ワラと木の枝とレンガを持っている。)
Bear	We're going to build a strong house.	僕たちの丈夫な家を作るんだ。
Little Pig 2	<u>How much are these bricks?</u>	おじさん、レンガいくら？
Donkey	<u>They are three dollars each.</u>	1つ3ドルだ。
Little Pig 3	<u>We'll take them.</u> Also, we'd like to buy this.	ありがとう。あ、それから、それもくださいな。
Fox	What will you do with this big pot, Rib?	こんな大きな鍋を何にするの？
Little Pig 3	I'm going to do some cooking. Right, everybody please help!	料理に使うの。さ、みんな手伝ってよ。
Animals	<u>Okay, Rib!</u>	ハーイ
Squirrel	It's heavy, isn't it!  (the clanging sound of construction)	重たいね。  (トンテンカンテン家を建てる音)
Giraffe	This time, <u>let's make a really strong house.</u>  (Little Pig 3 pours hot water into the pot. The elephant reads his newspaper.)  (The wolf gang arrives.) (Lieutenant carries bosses' chair.)	今度こそ丈夫な家を作りましょう。  (子豚3は鍋に湯を沸かす。ぞうは新聞を読む。)  (狼軍団登場) (サブはボスのいすを運ぶ。)
Wolf 3	Rarrrr, where did they run to?	ガオー、どこへ逃げやがった。
Wolves	(Sniffing around.)	(クンクンクン)

米田 佐紀子

Wolf 1	<u>They're here! Boss!</u>	ここです、ボス。
Boss	Hmmmmm. (Touches the brick house.)	フンッ (レンガの家を指さす。)
Lieutenant	I have a good idea.	私にいい考えがあります。
Lieutenant	(Takes out a box of potatoes.)	(いもの箱をかついで出てくる。)
Lieutenant	<div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; text-align: center;"> ♪いしや〜きいも〜、いしや〜きいも〜、ホッカホカ。  ♪いしや〜きいも〜、早く来ないといつちゃあうよ。  あわててこけて〜もしらないよっ。 </div>	
Lieutenant	<u>Sweet potatoes. Yummy, Yummy potatoes.</u>	
Fox	<u>Potatoes?</u>	いも？
Bear	<u>I'm hungry!</u>	小腹がすいてきたな。
Squirrel	<u>Me, too!</u>	ぼくもだ。
Chicken	I want to eat baked potatoes.	石焼き芋食べたいな。
Animals	<u>Me, too. Me, too. Potatoes, potatoes.</u> (Call for potatoes.)	僕も、私も。イーモ、イーモ (いもコール)
Elephant	Baked potato seller! (Goes toward the door.)	石焼き芋屋さん！(玄関にいこうとする)
Little Pig 3	<u>Wait! Don't open the door!</u>	待って。あけちゃだめ。
Lieutenant	<div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; text-align: center;"> ♪いしや〜きいも〜、ホッカホカ、ホッカホカ、ホッカホカ。(玄関前で何度も) </div>	
Little Pig 3	<u>How much are they?</u>	いくらですか？
Lieutenant	<u>They are one dollar each.</u>	1つ1ドルです。
Little Pig 3	<u>Do they taste good?</u>	おいしいですか？
Lieutenant	<u>Of course! Well, not as delicious as little pigs... oops!</u>	もちろんです。まあ、こぶたには負けま すがね・・・おっと！
Animals	(Look at each other.) Whaaaaaahhh.	(顔を見合わせる。) キャー。
Lieutenant	<u>Oh no!</u> (Throws away the box.)	しまった！(箱を放り投げる。)

## 英語劇を通して日本人児童に英語力を定着させる試み

Boss	<p>Ahhh. I'll blow this house down!</p> <p><u>1, 2, 3,</u> HUUUUUUUUUffffff.</p> <p><u>1, 2, 3,</u> HUUUUUUUUUffffff. Eh hh?</p> <p>Hey you! (Calls the rest of the wolves).</p> <p><u>1, 2, 3,</u> HUUUUUUUUUffffff.</p> <p>All of the audience too!</p> <p><u>1, 2, 3,</u> HUUUUUUUUUffffff.</p> <p>It's no good.</p> <p>(Falls down on his bum)</p>	<p>ええい、こんな家吹き飛ばしてやる。</p> <p>1, 2, 3, フー。</p> <p>1, 2, 3, フー、あれ。おい。</p> <p>(狼軍団を呼ぶ。)</p> <p>1, 2, 3, フー。</p> <p>観客の皆さんも、</p> <p>1, 2, 3, フー。</p> <p>だめだー。</p> <p>(座り込む)</p>
------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

### Scene 8 <Entering through the chimney strategy 煙突からはいる作戦>

Roles	Lines	台 詞
Lieutenant	Boss, what will we do?	ボス、どうしましょう？
Boss	I have a good idea. <u>Let's go in by the chimney!</u>	いい考えがある。えんつつから入るんだ。
Boss	I'll go first, and you will follow me! OK?	俺について来い！分かったな！
Wolves	Yes, sir!	へい
Wolves	(Slowly enters the chimney.)	(ゆっくりと煙突の中を進む。)
Boss	<u>Don't push me!</u>	お前ら押すなよ。
Wolf 1	Ahh! (Loses his footing and slips.) (Causes all the other wolves to fall.)	あつ！（足をすべらせて落ちる。） (そのいきおいで狼たちは全員落ちていく。)
Pigs 1, 2, 3	<u>1, 2, 3!</u> (Take off the lid of the pot.)	1、2、の3（鍋のふたを取る。)
Wolf Corps	(They all fall into the pot and get burned.)	(鍋の中に落ちてやけどする。)
Wolf Corps	Ow, ow, ow, ow, ow, ow, ow. (Run around in circles.)	あっちっちっちっー。 (走り回る)
Animals	(Laugh loudly.)	(大笑い)
Rabbit	(Happens to pass by and looks in.) <u>Wolves, are you ok?</u>	(通りかかりに見つけて声をかける) 狼さん、大丈夫ですか？
Rabbit	<u>Let's go to the hospital.</u>	病院へ行きましょう。

Cow	<u>Please wait. I'll give you an injection.</u>	待ちなさい。注射をうちましょう。
Wolves	Waahhh. We feel better. (Repeat Run around.)	ギャー。俺たちは元気だよー。 (繰り返す。走り回る。)
Pigs 1, 2, 3	(Skipping around.)  ♪ We're not afraid of the big bad wolves, big bad wolves, big bad wolves. ♪ We're not afraid of the big bad wolves, ta,da,da,da,da (Repeat)	(スキップしてまわる。)  ♪ オオカミなんてこわくない～ こわくない～ こわくない～ (くり返し)

資料の下線部は、6年生の既習文型に沿ったものである。語彙には新出単語もあるが、使われている多くの文が、子どもに馴染みのあるものとなっている。既習事項であり、なおかつ、ト書きもある。しかし、練習では話の流れや話し手の意図が汲み取れずせりふを棒読みする子どもも何人か見受けられ、日ごろの授業の学習項目と劇とが子どもの頭の中で乖離しているのではないかと感じられるところがあった。今後の指導の課題である。

発音については、個々の発音について、phonicsを毎時間指導し、劇では個人指導を授業外に行ったりもしたが、子どもの発音がカタカナ発音から直らないものもあり、受身ではなく自己産出的な指導の強化が必要であると感じた。立ち稽古の最終段階では1つ1つの音に気を取られるのではなく、イントネーションに注意させ、文を1つの塊として発音させることに重点を置いた。実際、コミュニケーションの現場では、後者のほうが通じやすい。

一方、子どもたちは劇をどのように受け止めているのだろうか。少人数のため、ここでは実数を記載する。

## <資料2 児童へのアンケート結果>

回答 6年生 17名

### 1. 英語劇をまたやりたいと思いますか？

- ・ はい 14名
- ・ ぼくがやりたい役にあたったらやりたい 1名
- ・ 少しやりたい 1名
- ・ いいえ 1名

### 2. 一番がんばったことを挙げてください。(人数の記載がないところは各1名)

- ・ 英語の発音 (2名)
- ・ 英語



英語劇を通して日本人児童に英語力を定着させる試み

- ・自分の役らしく歩いたこと。
- ・恥ずかしかったけど役を演じた。
- ・せりふ覚え。(2名)
- ・せりふを大きな声で言った。
- ・大きい声で言った。
- ・声を大きくして動作をしたこと。
- ・英語を言いながら大げさに振り付けをしたところ。
- ・動作を加えながらもうまく言えた。
- ・身振り手振り。
- ・CDを聞いたこと。
- ・踊り。
- ・歌を覚えたこと。

3. 次の項目について1つに○をつけてください。

	そう思う	どちらとも いえない	そう 思わない
A. 英語が前よりすらすら言えるようになった。	8	7	2
B. 英語が前より分かるようになった。(記入なし1)	9	5	2
C. 授業で習った英語の文型をどういう風に使えばいいのか分かった。	5	9	3
D. 英語の発音や文でいう言い方を何度も練習したのが良かった。	9	8	0
E. 英語の発音がよくなった。	7	6	4
F. 英語をいいながらジェスチャーをするのが良かった。	7	7	3
G. 台本に日本語と英語の両方がついていて良かった。	11	6	0
H. CDがついていたのが良かった。	11	5	1

1 番の「英語劇をまたやりたいと思いますか？」に対し、17名中16名の児童が「やりたい」と答えており、英語劇そのものを楽しんだことが分かる。

2 番の「一番がんばったことを挙げてください。」では、英語の発音やせりふの暗記など英語劇の真髄となる部分に子どもたちが努力をしたという結果が見られる。「せりふを大きな声で言った。」や「英語を言いながら大げさに振り付けをしたところ。」という子どもの意見が見られるところからも分かるように、発音に注意すると声が小さくなり、声を大きくすると発音が乱れるという事に子ども自身が気づき、発音・発声にジェスチャーを加えるという3つを同時にこなすという難問に苦勞し一生懸命取り組んだことが分かる。学習は「気づき」から始まると考える。ここからすると子どもたちは貴重な学習をしたことになる。日本語とは違う発音にジェスチャーを加え、大きな声

ではっきりと言うという指導をよりスムーズにまた効果的に行う方法を考えることが今後の課題である。子どもたちを飽きさせない工夫をしつつ、読み込みにもっと時間を割くべきなのかも知れない。立ち稽古前までの理解を深められる工夫が必要である。

3番目の「次の項目について1つに○をつけてください。」ではいくつか課題が浮き彫りになった。英語力の向上に関するA、B、C、D、Eの項目で、「向上した」と子どもが感じることを示す「そう思う」を選んだ子どもはほぼ半数の7名にとどまり、発音にいたっては変化なしという子どもが4名いた。CDがあって良かった(11名)とは言えるものの、自己評価ではあまり変化を感じていないと受け取れる。

実際のコミュニケーション上必要となる身振り・手振りに関する質問であるFの「英語を言いながらジェスチャーをする」ことについても半数弱の7名が肯定的な評価をしているが半数以上の10名が「そう思わない」か「なんとも言えない」と答えており、体得をした実感にまで至らなかったことを示している。

今回のアンケートからは「英語劇は楽しかったし、またやりたい。」、英語についてはせりふをめぐって「発音や発声、ジェスチャーをがんばった」と思っている反面、日常の授業の項目の定着という点について、子どもたちの自己評価が低く、課題を残すものとなった。

以上、英語コミュニケーション能力について、子どもの自己評価を中心に見てきた。英語力の定着については児童・教師から見て、「明らかな効果があった」とは結論付けられなかった。

一方、毎年のことであるが、劇の後に興味深い変化が子どもたちに見られる。劇が終わってからの授業では、劇中のせりふと同じ文型が出てくると、「あ、これ誰のせりふだった？」などと話し合い、劇を通して英語に対する興味と関心が深まったことが分かる。

また、北陸学院小学校の卒業生が中学校に上がった際に、中学校英語教師から、本学卒業生は他校の卒業生に比べ、発音の良さや英文が読めることや積極性が特徴である、と言われたことがある。子どもたち自身が思っているよりも効果が上がっているのかもしれない。

#### 4. 結 論

本論文では、英語劇が小学生の英語力にどのような効果をもたらすのかについて、先行研究にあたり、その上で、本学の実践から成果と課題について述べた。

先行研究で、英語による本物のコミュニケーション能力をつけるためには英語劇が有効であることを確認した。その後、本学の取り組みについて述べた。特に小学生においては発音やイントネーションで効果があるという英語劇であるが、CDをつけた台本作りなどをして取り組んでも、期待したほど効果が上がっていないのではないかという疑問が残った。子どもたちの英語の習得にあたり、言語転移理論という「構造的・非構造的要因」が強く影響しているのがその大きな理由と考えられる。これらの問題を踏まえた上で、日本人児童の英語教育の目標・指導を考えていくことが必要である。適切な目標設定と取り組みについて今後も検討していかなければならない。

またそれと同時に、英語に対する意欲は高まっており、せりふに対して日常の授業でも敏感に反応するようになってきているという事実から考えると、劇を取り入れる頻度を高めることがコミュニケーションタイプの英語力の育成と定着につながる可能性があると考えられる。今後、教師の負担等とも考え

## 英語劇を通して日本人児童に英語力を定着させる試み

ながら検討していく必要がある。継続して、コミュニケーションな英語力を如何にして培い、定着させることができるかを様々な角度から精査していきたい。

### 注

- 1) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/001/07110606/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/001/07110606/001.pdf) 平成19(2007)年11月7日 p.62-65
- 2) 米田佐紀子、村上好江、高田功、ギャビン・リンチ、前垣内紀三子著「小学校で養われる英語力について  
の研究ーケンブリッジ英検ヤングラーナーズテストを使った事例研究ー」『北陸学院短期大学 紀要  
第38号』 2006年  
Yoneda, Sakiko & Lynch, Gavin. *How Much English Can Japanese Children Learn in their Six-Year English Education in a Japanese School? -Evaluation using the Cambridge Young Learners Test.* 5th Asia TEFL International Conference 2007, Pre-Conference Proceedings (CD-ROM) 2007c.
- 3) 文部科学省『『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』の策定  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm) 平成14(2002)年7月12日  
仲田利津子著「内容別指導法」中山兼芳編『児童英語教育を学ぶ人のために』世界思想社 2001年  
p.139
- 4) 米山朝二著『英語教育』松柏社 2002年 p.247-248
- 5) 中山兼芳編『児童英語教育を学ぶ人のために』世界思想社 2001年  
佐野正之編『英語劇指導マニュアル』玉川大学出版部 1990年
- 6) 佐野正之編『英語劇指導マニュアル』玉川大学出版部 1990年 p.10-15
- 7) 米山朝二著『英語教育』松柏社 2002年 p.292
- 8) 佐野正之編『英語劇指導マニュアル』玉川大学出版部 1990年 p.19-23
- 9) 小川恵子「小学生の英語劇指導」佐野正之編『英語劇指導マニュアル』玉川大学出版部 1990年  
p.119-133
- 10) Kampa, Kathleen & Vilina, Charles. *Magic Time 1.* Tokyo: Oxford University Press. c2001
- 11) Rivers, Susan & Toyama, Setsuko. *English Time 1-3.* Tokyo: Oxford University Press. c2001
- 12) Yoneda, Sakiko & Lynch, Gavin. *How Much English Can Japanese Children Learn in their Six-Year English Education in a Japanese School? -Evaluation using the Cambridge Young Learners Test.* 5th Asia TEFL International Conference 2007, Pre-Conference Proceedings (CD-ROM) 2007c.
- 13) 米田佐紀子著「言語転移研究とバイリンガリズム研究ー日本人児童の英語と日本語の会話能力テストを中心ー」(博士論文) 金沢大学 2005年 p.24-44

### 参考・引用資料

- Cambridge ESOL results service. <https://cambridgeesol-results.org/> 2006年10月  
*Cambridge Young Learners English Tests Past Papers.* Cambridge University Press. c2001.  
Kampa, Kathleen & Vilina, Charles. *Magic Time 1.* Tokyo: Oxford University Press. c2001  
Rivers, Susan & Toyama, Setsuko. *English Time 1-3.* Tokyo: Oxford University Press. c2001  
Yoneda, Sakiko & Lynch, Gavin. *How Much English Can Japanese Children Learn in their Six-Year English Education in a Japanese School? -Evaluation using the Cambridge Young Learners Test.* 5th Asia TEFL International Conference 2007, Pre-Conference Proceedings (CD-ROM) 2007c.  
小川恵子「小学生の英語劇指導」佐野正之編『英語劇指導マニュアル』玉川大学出版部 1990年

米田 佐紀子

佐野正之編『英語劇指導マニュアル』 玉川大学出版部 1990年

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/001/07110606/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/001/07110606/001.pdf) 平成19(2007)年  
11月7日

仲田利津子著「内容別指導法」 中山兼芳編『児童英語教育を学ぶ人のために』 世界思想社 2001年

中山兼芳編『児童英語教育を学ぶ人のために』 世界思想社 2001年

バトラー後藤裕子『日本の小学校英語を考えるーアジアの視点からの検証と提言』 三省堂 2005年

文部科学省「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」の策定

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/020/sesaku/020702.htm) 平成14(2002)年7月12日

米田佐紀子著「言語転移研究とバイリンガリズム研究ー日本人児童の英語と日本語の会話能力テストを中心にー」

(博士論文) 金沢大学 2005年

米田佐紀子、村上好江、高田功、ギャビン・リンチ、前垣内紀三子著「小学校で養われる英語力についての研

究ーケンブリッジ英検ヤングラーナーズテストを使った事例研究ー」『北陸学院短期大学 紀要 第38号』

2006年

米山朝二著『英語教育』 松柏社 2002年